



ロボットです、と言われたら、どこか、と聞きたくなる。
1人ではゴミが集められない「ゴミ箱ロボット」(左)
教えてもらっても、なんの役に立つのか、
いまいつかめない「む〜」(右上)
オドオドするばかりのティッシュ配り「アイ・ボーンズ」(右下)
最先端のロボット研究室と思えないのどかさ



「弱いロボット」だから、
できること

ぶっちゃけインタビュー
岡田美智男 さん （おだみちお）
豊橋技術科学大学
情報・知能工学系 教授

18

里見喜久夫(「コトノネ」編集部)=インタビュー
interview by Kikuo Satomi
岸本 剛=写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

役立たずの「弱いロボット」

— 研究室で、著書『弱いロボット』(※)にでてくる本物のロボットに会えました。ゴミ箱ロボットがヨロヨロ近づいてくる姿を見るだけで、笑ってしまいますね。あまりの頼りなさに。人にゴミを拾って入れて、とすぐさだけで訴えるんですね。あれは、いつごろの作品ですか。

「ゴミ箱ロボットは、二〇〇六年ぐらい。いまの大学に来てからですね。」

— 「弱いロボット」の第一号は？

「む〜」というロボットですね。二〇〇〇年ごろ、前の研究所、ATR(※)の時代に開発しました。

— 凜々しいロボットは一台もないんですね(笑)。

ロボット技術者ではないから、ガラタのようなものしかつくれない(笑)。ロボットと人との関わり合から、コミュニケーションと身体の関係が見えてこなかったか、という興味で研究をはじめたんです。それで、完全無欠なロボットとい



「賢いロボット」でも、「強いロボット」でもない。

岡田美智男さんは「弱いロボット」の研究者。

「ゴミを見つけるけれど拾ってくれない。」

ティッシュを差し出すくせに渡してくれない。

中途半端な仕事しかできないロボットを開発する。

動作は、オドオド、ヨロヨロ、モジモジ。

しっかりせいや、と言いたくなる。

そうか、俺がいないと、まともなことができないのかと、

つい手を出したくなる。

人から人らしさを奪うのではなく、

弱さが、人らしさを呼び起こしてくれる。